
二つの願い

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの願い

【Nコード】

N5018V

【作者名】

リン

【あらすじ】

俺はいつも通りのバカをやってるつもりだった。それが何で…。

七月六日の夜。高校の教室に忍び込んだ俺達は、噂だと思っていたことが本当に起きて閉じ込められてしまった。

願い事を叶えるという天使と悪魔。願いが叶うというのは幸福なのか、不幸なのか。哲学なんかじゃねえ。こんな単純な問題があったなんて。

まさかとは思うけど、俺達ここから帰れないとかないよな？

（前書き）

夏のホラー2011参加作品です。他に二作品ありますので、あ
らすじや文字数から読みやすいものを選び下さいませ。ご興味を
頂ければ、他の二作にもぜひお越し下さい。

ハッピーエンド、バッドエンドともに用意しておりますが、この
作品がどちらなのかはここでは申しません。お楽しみ頂ければ幸い
です。

まさか、こんな噂話を真に受けるとは。笑いが止まらない。

「よく来てくれたな、こんな時間に」

ここはいつも通い慣れている高校の、自分の教室。教室の中央で、机に置いた蝋燭を囲んでいるのは、俺を含めて四人。中学時代からの付き合いで、たまにこういうバカをやって楽しんでいる。

「呼び出したのは直樹でしょ。ねえ、ホントなの？ あの話」

いつも通り文句を言うのは麻紀。ホントのはずがないだろ。……
とは言わないが。

「ホントだよ！ 疑ってんなら来なくて良かったのにな」

「まあまあ。ホントだったら面白いじゃないか」

真一もいつも通り。優しくて真面目なクセに、たまにシヤレたことを言うもんだから、性格は全然違うけど、ウマが合う。頭のキレが良いから、俺としてはそこがちょっと羨ましかったりする。

「直樹君。もう一度ちゃんと説明してもらってもいい？」

美咲はホント素直だよなあ。可愛いぜ。このコになら何回説明してもいいって思う。

「OK。この高校では、二年の七月七日を自分の教室で男女ペアで迎えると、天使と悪魔が降臨して、それぞれ願いを叶えるらしいんだ。それで、こんな時間に集まってるってワケだな」

当たり前だけど、そんな都合の良い話があるはずがない。夜に集まって、下らないことを喋りたいだけ。そんなの麻紀以外はわかってるだろうけど、それでも集まってくれるコイツラが好きだ。

「まあ、俺はいいけど、さすがに今回は女のコはマズかったんじゃないのか？ もう零時近いんだ」

「真一の言う通り。ウチの親はうるさいんだあ。でも、ま、アタシは好きで来てるから大丈夫」

「美咲ちゃんは大丈夫なのか？」

「うん。黙って出てるけど、朝までに帰ってれば大丈夫だよ。ありがとう」

真一はこういう気遣いがあるからモテるのかなあ。俺もそういうの……いや、無理だな。

「さて、あと五分もすれば七月七日だな。何が起るんだろうな」
どうせなら、本当に天使や悪魔が出てくりや面白いのにな。出て来ねえかな。

七月七日。零時五分。真一も、麻紀も、美咲も、いる。表情はそれぞれだけど、たぶん、考えてることは同じなんだろう。誰が最初に……

「すごいっ！ ホントに出たよ！ 直樹、お手柄だよ！ どうしようね！」

やっぱり麻紀か。この能天気、いや、明るい性格は、今は大事なな。

「だ、だろ？ 夢みたいだろ。は、はは……」

なんてこった。本当に願いが叶えられるとしたら、すごいことだぜ。

「とりあえず、マズいことにならないように、状況を整理しておこう」

真一がメモ用紙とペンを取り出している。真面目だな。こういうヤツは失敗とか、滅多にしないんだろうな。美咲もペン出してたけど、戻したな。真一になら任せられるってか。

「真一君がまとめてくれる？ 全員の願いを叶えてくれるって言ってたよね。あと、天使と悪魔、それぞれが叶えてくれるって」

「つまり、一人二つの願いが叶うことになるな」

「贅沢だよな。何を叶えてもらう？ アタシ、ホントに迷っちゃうよ」

「そついや、どうやって叶えてもらうんだっけ？」

「直樹君、ちゃんと聞いてなかったでしょ。大変なことになっちゃうよ？」

確かに、結構いい加減に聞いてたな。そんな大事な話してたっけか。

「天使、悪魔、それぞれが『本気の願い』だと判断したら、それが叶うんだ」

「へえ。どうやって判断するんだろうな」

「それはわからないし、直樹はもう少し真剣に考えた方がいいぞ。かなり厄介なんだ」

願いが叶うんだから、いい話だろうがよ？ 元々は叶うはずがないことなんだし。

「真一も美咲も真面目だね。アタシもあまりちゃんと聞いてなかったけど、ただで願いが叶うんだから、ちよつとくらい小さな願いになったっていいんじゃないかな」

そうそう。麻紀の言う通りだぜ。

「麻紀ちゃん。悪魔が叶えるのは、『叶って欲しくない願い』だぞ」
麻紀が黙った。もちろん俺も。

……は？ いやいや、何だ、それ。それって願いじゃねえだろ。

いや、叶って欲しくないって願うんだから、願いなのか？ わからねえ。

「だから、ね。あまりヘンなこと考えない方がいいと思うよ」

「脅かさないでよ、美咲。ヘンなことって、例えば、何？」

「うーん、すぐに浮かばないけど、真一君、説明できる？」

「俺に振るの？ あまり言いたくないけど、例えば、『麻紀ちゃんの裸が見たい』とか願うと、そうなるっちゃうかも知れないんだぜ？」

麻紀の裸？ 一つしか叶わない願いをそんなことに使うか？ もつたいねえって。

「ちよ、ちよつと、真一！ クールな振りして、実はスケベだったの！？」

「いや、例えばだって。だから、言つの嫌だったんだよ」

麻紀が真一に食ってかかっている。真一が困った顔するなんて、珍しい絵だから、ちよつと面白いな。

「最低っ！ 大体……やつ！」

おかしな声を出しながら椅子から転げた麻紀に思わず目をやる。

……っ！ 裸じゃねえか。胸は腕で覆ってるけど、スラつとした腰は目を惹く。まさか、下も……

「それ、使いなよ」

言葉の前に、革のジャンパーが麻紀に飛んだ。床にしゃがんだまま、身体を隠す。

うーん、もう少し見たかったような。真一はホント、真面目だな。「ちよつと、どうしてくれるの！ こんなこと本気で願うなんて、このスケベ！」

「とりあえず信じられなくても仕方ないけど、俺が願ったんじゃない。それに……」

「言い訳なんか、聞きたくないよ！ 真一のバカ！」

「麻紀、落ち着いて。私も真一君じゃないと思う」

今、美咲が真一に目配せしたような。気のせいかな？

「真一じゃなかったら俺しかいねえだろ。美咲、そりゃないぜ」

「それより、今は『本当に願いが叶う』ことが大切じゃない？ ね、真一君」

真一が黙って頷く。まあ、確かにこれで、願いが叶うことは証明されたワケだよな。

「って言ってもなあ。どうするんだ？ お互いにヘンなこと願わないように見張るのか？」

「こういう時って、お互いが疑うとダメだと思うの。みんなの願いを、みんなで使ったらいいんじゃないかな」

「あれ？」

麻紀の声に反応して、そつちを見る。

「あれ？ 麻紀、服着てるじゃん」

「何でだろ……？ 急に元に戻ってたんだよね」

「私の願い。私だって、隠すものあったとしても、やっぱり裸でいるなんて嫌だから」

美咲、優しいな。麻紀の為に自分の願いを使っただのか。

「あ……！ ごめんね、美咲。アタシの為に」

「いいよ、そんなの。それより、協力して、『悪魔の願い』を何とかしよう。ね」

「う……ん。真一、ジャンパー返すよ。でも、まだ信じたワケじゃないからね」

真一、辛そうだな。確かに真一はそんなヤツじゃないはずなんだけど、状況からすると真一しかないんだよね。

「で、具体的にどうする？ 俺はいい案が浮かばないんだけどさ。」

真一はどうだ？

「みんなの願いの状況を管理した方がいい。誰のどの願いが残っているのか」

そう言って、真一はメモを机に置いた。表に綺麗にまとめてある。

「はっきりしている願いは、今までに二つ。麻紀ちゃんの服が消えたことと、戻ったこと。戻ったのは美咲ちゃんの『天使の願い』だ。消えたのは……」

「真一の『天使の願い』でしょ！」

麻紀はかなり怒ってんなあ。俺はちょっと得したんだけど。

「……今はそれでもいい。大事なのは、どの願いが残っているのか、みんなが把握することだ。この場合、俺と美咲ちゃんの『天使の願い』はもうない。それに対して、『悪魔の願い』が四つも残っていることになる」

確かに、それで最悪の事態みたいなのを想像したりしたら、どんなでもないことになるよな。大体、こういう時つてのは閉じ込められるつてのが定番で……

「あのさ、まさかとは思うけど、俺達ここから帰れないとかないよな？」

「直樹！」

「あ！ すまん、つい」

真一の声に反応するように、美咲が入口に向かった。ガタガタとしばらく音を立てて、ゆっくりと振り返る。これから何を言うのかは想像できるけど、希望を込めて、待つ。

「……開かない」

「う、嘘でしょ？ 美咲、冗談やめ——」

麻紀が入口、窓、それをいくつか調べて言葉を無くす。無言のまま、教室を一周し、全ての希望に蓋をした。

「俺も、調べて来る……」

鍵をかけてもはずしても、扉も窓も開かない。ガタガタと揺れるのに、一切開かない。どうなってんだよ！

「助けを求めた方がいいかも知れない。とりあえず明かりを点けよう」

真一が入口横に向かい、電灯のスイッチを切り替える音がした。

数回の点滅を繰り返して、蛍光灯に明かりが灯る。

「良かった……明るいだけでも少し安心するね……」

麻紀が安堵した表情を見せる。無理もない。俺も悪寒を感じるくらいだ。不安なんだろう。

「っ！」

悲鳴を飲み込んだような声を上げて、入口の扉についている窓を覗いていた美咲が座り込んだ。廊下側の窓はすりガラスになっているから、あの窓からしか廊下は見えないけど、廊下に何かいるのか？

「何も……ないだろ？ 真っ暗じゃん」

「何だつて？」

今度は真一が驚いて隣へ来た。何だつてんだ。夜中なんだから暗いのは当たり前だろ。

「完全に……閉じ込められたのか」

「おいおい、真一。廊下なんか覗いたくらいで何がわかるんだよ」

「直樹、廊下が真っ暗なはずがないだろう？ 何で教室の明かりが

漏れないんだよ」

……！ 言われてみれば、そうだ。廊下の床も柱も窓も、何も見えない。教室は電気が点いてるのに。そうだよ。おかしいじゃねえか！

「この様子だと、たぶん、声や音も漏れないな」

「ねえ、もう嫌だよ！ 帰りたいよ！」

麻紀が泣きそうな声で言う。その声も震えている。俺も、まだバレない程度だけど、手が震えている。けど、帰る方法がない。

「私、こついのダメなの。幽霊とか、そついのまで出てきたりしたら……」

「美咲ちゃん！ 大丈夫！ 大丈夫だから！」

真一は平気なのか？ 平気な振りをしてるだけか？

「うわっ！」

思わず声を上げちまった。情けねえ。

「ねえ！ みんな、いるよね！？」

麻紀の声。明かりは消えた。電気も、蠟燭も。目の前には、ただ黒いものが映るだけ。いや、何も映ってないのか。完全な闇だ。

「麻紀ちゃん。大丈夫だ。みんなも聞いてくれ」

真一はやっぱ頼りになるな。俺はどうしていいのか思いつかない。

「少し経てば目が慣れる。みんなの姿くらいは確認できるはずだ。」

そうしたら、落ち着いてもう一度状況を確認する」

「そんなことしても、ここを出られなかったら意味ないでしょ！」

「真一君、怖いよ……」

「大丈夫！ 大丈夫だから、落ち着くんだ！ 直樹！ 何か話してくれないか」

何かって言っても、冗談を言える状況でもない。面白いことを考える余裕も……

「直樹！ 元はと言えばアンタがこんなことと呼び出すから！」

「何っ！ 麻紀だって喜んでただろうがっ！」

「落ち着け！ ほら、目が慣れてきただろ！ みんな見えるぞ」

確かに、うつすらと教室が見える。三人の姿も、何となくわかる。誰からともなく、全員が中央の机に集まる。全員が椅子にかけたところ、真一が口を開いた。

「みんな、落ち着いてくれ。美咲ちゃんが言っただように、『悪魔の願い』を何とかしなきゃならない」

「もう、嫌だよ。そんなのいいから、帰りたいよ」

麻紀の気持ちもわかる。俺も、願いなんてどうでも良くなってきた。

「俺は、『悪魔の願い』さえ全部叶えてしまえば、それでいいと思うんだ。それが確認できない内にバラバラになるのはあまり良くない」

「そんなのどうやって確認するの？ 大体、アタシさつきからずっと、本気で帰りたいって願ってるのに、帰れないんだよ？ 誰のどの願いがどうなってるかなんて、わかんないでしょ」

ん？ そうか。帰りたいって願えばいいんだよ。

「麻紀、ナイスだ。俺の『天使の願い』はまだ残ってる。それでみんな帰ればいいんだよ」

みんなが無事に帰りたい。今すぐに、ここから帰りたい。

「……直樹君？ 本気でお願いしてくれてる……なんだよね？」

「おつかしいな……？ 本気で願ってるんだけどな」

みんなが無事に帰りたい。今すぐに、ここから帰りたい。

「ちよつと、直樹。全然ダメじゃないの。ホントに『天使の願い』

残ってるの？ あ！ まさか……」

「麻紀ちゃん、落ち着くんだ。みんなで整理してみよう。何かわかるかも知れない」

おいおい。俺が麻紀の裸を願ったってのか？ そんなはずはない。見たいかどうかで言えば、そりゃ見たい。けど、たった一つの願いでそんなことを願うほどバカじゃない。

あれ？ そうすると、真一だってそうだよな。大体、うまく願えば一度きりじゃなくて、何度も裸くらい見る方法はあるんだ。真一

がそれくらい気付かないはずがないよな。どうなってんだ。

「みんな、よく思い出してくれ。普通は起こらないことが起きた時に、本気で願ったことがないかどうか」

さっきもこういう話をしてたんだよな。そういえば――

「俺が帰れなくなるかも知れないとか言ってたから……」

「たぶん、それが直樹の『悪魔の願い』なんだろうな。それで外に出られなくなった」

「アタシの『天使の願い』は何で無いのよ」

「それなら、俺もそうだよ。何で無いんだよ」

「今は『天使の願い』は置いておこう。『悪魔の願い』さえ何とかすれば、危険はないんだ」

まあ、確かにそうだ。俺のはもう無いとして、他におかしなこと

「そうだ、電気が消えたのは誰の願いなんだ？」

「あ……私、かも」

「そういえば美咲ちゃんはさっき、幽霊とかダメだって言ってたな」

真一はよく聞いてんな。俺はそれどころじゃなかったぜ。

「そういうのが怖いって想像してたら、突然……」

ってことは、どこかに幽霊とかもいるのか？ 電気が消えたのも、

そいつの仕業……？

「もしかして……だけど、それじゃあ……」

真一は何をぶつぶつ言ってるんだ？

「真一、何かわかったのか？」

「直樹、『天使の願い』はもう無いんだよな？」

「ああ、何に使ったのかはわからねえけど、無いと思うぜ」

そんなのが何か関係あるのか？

「麻紀ちゃん、正直な話、俺達が死ぬような想像をしなかったか？」

「……うん。した。けど！ みんな、何ともないじゃない！」

「いや、責めてるんじゃないんだ。ごめん」

真一は何を確認してるんだ。全然わかんねえ。

「いやっ！」

「どうした、美咲ちゃん」

「ロッカーから、音が……」

言われてみれば、そんな気はするけど、俺達以外誰もいないのに、でも、耳を澄ましてみると、確かに何か聞こえるな。

「俺が見て来るよ。ちよつと待っててくれ」

真一にばかり、イイカツコはさせられない。

ロッカーの中身は掃除道具。ロッカー自体は教室の隅にある小さなもの。ヒトが入ろうと思えば、直立で一人が何とか入れるサイズだけど、掃除道具が入ってるんだから、無理だ。チリトリが揺れるとか、ホウキが傾いたとか、雑巾が落ちたとか、そんなところだろ。

まあ、幽霊がいるのかも知れないけど、ここは退けねえよ。

「こいつだな。開けるぞ」

自分に言い聞かせるようにして、少しでも背中を押す。取っ手に手をかけて、一気に開く。

「はは。何ともないぜ」

そこには普段通り、掃除道具が並んでいるだけ。ビビってた自分がバカらしいぜ。

「ねえ、直樹君。まだ、聞こえるよね……？」

「美咲、何も無いつて。自分でも見て……ん？」

聞こえる。今度ははっきりと。笑い声のような、呻き声のような。

「何、これ！ アタシも何か聞こえるよ！」

「二人とも、落ち着いて。大丈夫だから。直樹、確認できるか？」

できるかだつて？ ここで代わってくれなんて言えるワケねえつて。美咲は真一の手を握ってるみたいだな。こっちはハズレくじだったか。

「ロッカーの裏側かな？ こんな狭いところに何があるって——」
声らしきものが聞こえていた隙間。ロッカーと壁の間、拳すら入るかどうかの隙間を覗く。

明かりも無い空間で、こんなに狭いところだというのに、確かにいた。ヒト、が。俺と同じ、頭があって、身体があって、腕があって。脚を見る余裕はなかった。

いるはずは、いや、いられるはずは、ない。それでも、確かにいたんだ。間違いなく、真っ直ぐこつちを見て立っていた。どうやって？　そもそも、何であんなにはつきりと、いることがわかるんだ。「お——」

振り返った俺の目の前を、椅子が通り過ぎる。その直後に、黒板に突き刺さる。教室には、誰も、いない。

「お、おい！　みんな、どこに行っただよ！」

笑い声に反応して振り向くと、閉じたままの入口の扉と柱の隙間に、さっきのヒトがいた。さっきよりも狭い隙間に、はつきりと、いることがわかる。表情もはつきりとわかる。これ以上、俺は退がる場所がない。

また、椅子が飛ぶ。今度は窓にぶつかり、そのまま落ちる。何で割れねえんだよ！　逃げ場を探しながら、はっと視線を戻すと——いた。俺の目の前に。俺は咄嗟に目を閉じ、横へ這って逃げた。目を開くと、もう、そこにいた。どうしようもない。どこを向いても、どこへ逃げても、目の前に、いる。いや、いた、のか。俺の視線よりも先に、常にそこにいる。そのヒトは全く、動く様子もない。ただ、俺の目の前で笑うだけ。

もう、声も出ない。渴いた喉は助けを求めることすら許さない。けど、害は無い。見なければいいんだ。あとは、助けを待つしかない。俺は、ゆっくりと目を閉じた。

そこには、もう、いた。瞼はもう、開かない。はつきりと、俺の瞳の前、だけど、瞼の内側に、いる。さっきまでよりも、一層嬉しそうに笑うと、大きく開いた口が俺に迫ってきた。

俺は、気付いたら自宅にいた。普通に朝起きて、学校へ行く。そんな日常を目の前に、あれは夢だったのかと疑いたくなる。

「直樹、おはよ」

「真一。おはよ。昨日ってさ、みんなが集まったよな？」

登校途中で顔を合わせるのも、いつものことだ。

「ああ。最後は結構ヤバかったな」

「やっぱり、夢じゃないよな？俺は気付いたら家にいたけど、どうやって帰ったんだろう」

「ああ、それは俺の『天使の願い』だ」

「やっぱり、麻紀のは真一じゃなかったのか」

「もしかして、疑ってたのか？」

まあ、少し……な。黙っとくか。

「いや。けど、だったら何でもっと早く願わなかったんだよ？」

「まだ、『悪魔の願い』が残ってると思ってたんだよ」

そうか。だから真一はずっと『大丈夫』って……。

ってことは、全部無くなったのか？いつ？

「確か、真一と麻紀のはわかってなかっただろ？何が叶ったんだよ」

「たぶん、麻紀は、裸になったのが『悪魔の願い』だ」

ああ、そういうことか！俺達が死ぬとか、そんなことを想像しても、それが叶う前に『悪魔の願い』は使ってたんだな。それを真一は確認して……ん？俺の『天使の願い』も確認してたな。

「おい。もしかして、真一は俺が麻紀の裸を願ったと思ってたのか？」

「悪い、きっちり確認したかっただけなんだ。信じて正解だったと思う」

「あれ？じゃあ、結局俺の『天使の願い』はどこに行ったんだよ？」

「直樹に心当たりがないなら、たぶん、俺の予想が当たりだな」

「もったいぶるなよ。何だよ、言えよ」

「直樹は四人でつるものが本当に好きってことだろ」
何を今更。意味わかんねえよ。

「ふーん。どうせそれ以上は言わねえんだろ。麻紀は『天使の願い』残ってんのかなあ」

「麻紀はたぶん、裸をとにかく隠したかったんだと思う」

「おいおい、隠したのは真一だろ」

「まあ、な。けど、俺の意思だけじゃないような気がするんだ」

「どういうことだよ？」

「正直言つと、俺も少し、見たかったんだ。見てないけどな」

「何だよ、真一も男なんだな。見直したぜ。」

「で、真一の『悪魔の願い』は何だったんだよ？」

「それは秘密だ」

「お前なあ。まあ口が堅いのは前からだしな。話変わるけど、美咲と手を握り合ってただろ。いい役持ってたなあ、おい」

「話が変わってないんだよ……」

「直樹、真一、おはよ」

麻紀の声だ。振り返ると、美咲も一緒だった。

「真一、美咲から聞いたよ。ふっふっふ」

「麻紀！ 内緒だって言っただじゃ……」

「何だよ、俺だけ除け者かよ？ 俺達の仲でそれはナシだろ」

「美咲ちゃん……約束が違うだろ。俺は悪魔や幽霊より、女のコが怖いよ」

「アタシは何を考えてるのかわからない真一が怖いなあ。あははっ」

「麻紀、お願い、やめて……」

こうやってバカやってられるのはやっぱり楽しいな。俺の『天使の願い』は天使や悪魔が来る前に叶ってたのかも知れないな。

「おい、俺にも絶対教えろよ！ 絶対だぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018v/>

二つの願い

2011年8月8日17時07分発行